

# 世界の吉野川へ

## ラフティング世界選手権プレ大会

ザ・リバーフェイス・三好ラフティングチームユース男子・SakuLa

三好市を拠点とする3チームがラフティング世界選手権2017出場決定



①

①海外で唯一の参加となったオーストラリアチーム。2艇でタイムを競うヘッド・トゥ・ヘッド (H2H) で先頭争いを制し激流を下る  
②スラロームでゲートをくぐるザ・リバーフェイス  
③スラロームで最終の14ゲートに向かうSakuLa  
④最終日のダウンリバーレースを控え、健闘を誓う三好ラフティングチームユース男子



②



③



④



⑥



⑦



⑧

⑤約8キロのダウンリバーレースの中でも1.2を争う難所の国政吊り橋上流「イド瀬 (曲がり戸の瀬)」  
⑥「イド瀬 (曲がり戸の瀬)」をチームワークで乗り切るSakuLa  
⑦手作りの横断幕で三好ラフティングチームユース男子を応援する女子高生  
⑧5チームが参加したジュニア&ユースのダウンリバーレースで勢いよくスタートする男子チームら  
⑨ゴールした選手をねぎらう三好ラフティングチームユース男子監督の竹村碧さん (元ザ・リバーフェイスメンバー)



⑨



⑩



⑤



⑩



⑪



⑬



⑫



⑭



⑮

⑩スプリント&ヘッド・トゥ・ヘッド (H2H) のコースとなった山城町西宇で選手にエールを送る観客ら⑪徳島中央病院救急科の大村医師をはじめ看護師および保健師 29 名がボランティアで選手の救護活動を務めた⑫世界ラフティング協会のジョー・ウィリー・ジョーンズ会長が閉会式で挨拶。世界の激流吉野川を高く評価した⑬救護活動を事前に確認し合う自衛隊員と消防団員。陸上および水上に分かれ延べ 180 人が選手の安全確保に努めた⑭ボランティアで参加した婦人会員らが選手に弁当を配布⑮マスターズ男子で日本代表に選出された RGMasters の三好市池田町在住の八木澤さん (後列左から 3 番目) ⑯来年 10 月の世界選手権出場を決めた三好市を拠点とする 3 チーム。左から SakuLa (赤ジャージ)・ザ・リバーフェイス (水色) 三好ラフティングチームユース男子 (黒色)

急な流れや安定した水量から国内屈指のラフティングスポットとして知られている大歩危・小歩危一帯の吉野川中流域で、日本初開催となる「ラフティング世界選手権2017」を前に、10月8日から10日までの3日間、プレ大会が開催され、オーストラリアをはじめ国内外19チーム130人の選手が参加し、熱戦を繰り広げました。

競技ラフティングはゴムボートで激流をいかに早く正確に下れるかをタイムで競うスポーツで、短距離(約300m)のタイムを競うスプリント、2艇が同時にスタートしトーナメント戦を行うヘッド・トゥ・ヘッド(H2H)、規定のゲートを順番通り通過するスラローム、長距離を下るダウンリバーの4種目の総合得点で争われます。

今回は、来年10月に開催される世界選手権の日本代表選考も兼ねており、三好市を拠点に活動する3チーム(ザ・リバーフェイス・三好ラフティングチームユース男子・SakuLa)が参加。気迫のレースを展開し、見事日本代表権を手に入れました。

オープン女子の部門で代表権を手に入れたザ・リバーフェイス

の水澤知香主将は「まずは今年UAEで開催される世界選手権で力を合わせて優勝を目指し来年の世界選手権につなげたい」と抱負を述べました。三好市内3高校合同チームを結成し大会に挑んだ三好ラフティングチームユース男子の久保祐也主将は「竹村監督とともに短い期間でトレーニング積んできました。この大会で得た経験をもとに川の流れをしっかり把握するなど課題を克服していきたい」と意気込みを語ってくれました。また、マスターズ女子SakuLaの亀井照代主将(元ザ・リバーフェイス)は「初めて参加するメンバーもいる中、代表権を得ることができてほっとしている。個々のスキルとフィジカルを上げて来年挑みたい」と抱負を語ってくれました。

日本初開催となる2017年の「ラフティング世界選手権」では、約30か国70〜80チームが参加し、多くの観客の来場が見込まれています。

今後、市では、プレ大会の課題をもとに外国人観光客が訪れやすいよう整備を進めていくとともに、観客の方々がより臨場感を味わうことができよう基盤整備を進め、大会の成功に向けて準備に取り組んでいきます。